

Doctor's SPECIAL INTERVIEW VOICE

日本医科大学 医学部 形成外科学教室 主任教授

小川 令



「学問っぽくない」
学生時代に確信した
形成外科学の創造性

日本医科大学小川令教授のもとには、1日に100人以上の患者さんが受診に来る。日本全国はもちろん、海外から受診に訪れる患者さんもいる。ある日、診療が終わってみると一人の患者さんが数時間かけて小川教授が出てくるのを待っていたという。

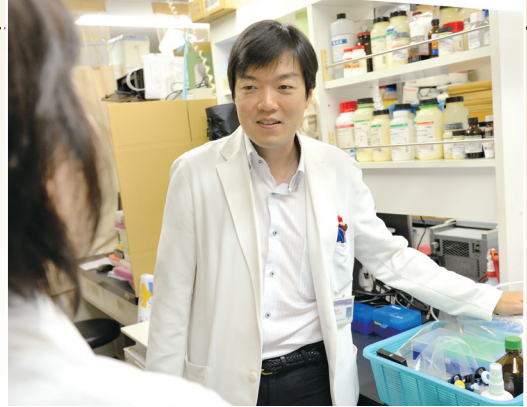
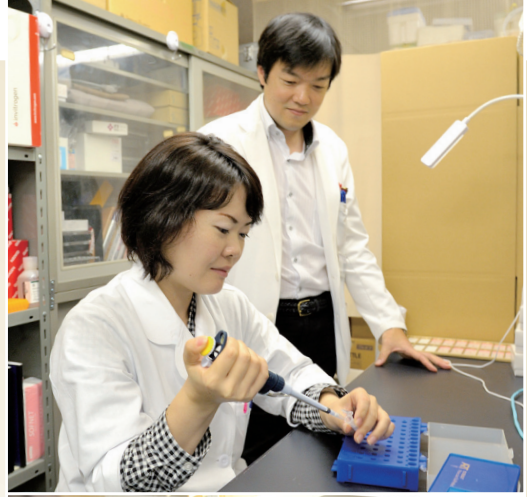
「『顔に傷ができて、一生外には出られないと思っていました。こんなにわからないように治療していただいてありがとうございます』と言われました。その時は、本当に治療をやっていた良かったと感じましたね。『傷のケアは心のケア』なんです。それが僕の信条で、傷だけを診るのではなく、いかに患者さんが幸せに社会復帰できるようにすること。それが僕の一番の目的です」

Dr. Rei Ogawa

日々の診療における信条は
「傷のケアは心のケア」。
患者さんに寄り添い
幸せな毎日を取り戻す。



**治療方法は同じでも
患者さんのニーズによって
医師の対応の仕方は
異なることを強く意識するべき。**



メカノセラピーの研究現場

高校に入るまで、医師を目指すつもりはまったくなかったという小川教授。著名なイラストレーターの母、グラフィックデザイナーとして活躍する父というアーティストの家庭で育った。高校も3年生の後半にさしかかったとき、将来の進路を考えると、いつも病気について丁寧に説明してくれた近くの医師が思い浮かんだという。その医師にかかると、いつも自分は安心できた。同じように誰かに安心を与えてあげられるのなら医師になってみよう。そう考えて1年の浪人を経て日本医科大学に入学した。

6年間の医学部の学びで、もっとも印象に残ったのは形成外科学の授業だった。「医学部では膨大な量の知識を覚えなければならぬのですが、形成外科学はまるでそうではなかった。ぜんぜん学問っぽくないというか、どちらかというと、私が家庭で慣れ親しんでいたアートに近い。たとえば、こちから皮膚をもってきて傷を治す。傷跡を整えて目立たないようにする。そのときに、アーティストのような創造性が求められるんです。そこにきっと面白さを感じたのですね。それで、形成外科医になろうとすぐ決心しました」

の医師が7グループに分かれ診療にあたる。

「近代の形成外科は、口唇裂や小耳症など先天性異常を治す子どもたちの医療が始まりです。これに加えて、怪我や熱傷、がんの治療などで失った身体の組織を治す再建外科の分野が拡大しました。

さらに、解剖学的には正常ですが、心のトラウマになっているところを治してあげたいということから美容外科が生まれました」

この3つの領域は、治療方法こそ同じものだが、患者さんのニーズによって医師の対応の仕方が全く異なることを強く意識している。「形成外科は、先天性異常を持つお子さんのご家族をいかに安心させてあげられるかが大事です。再建外科は、もともと持っていた身体の組織が失われて失望している患者さんに寄り添って、前向きに一緒に進んでいくことが求められます。美容外科は、たとえば鼻を高くしたいなど、なぜそこを治したいかということ、患者さんとゴールを共有することが重要です。そのために診療科を分けて医師も強く自覚できるようにしています」

**物理的な力を利用して
新たな治療法を開発する
メカノセラピー**

小川教授はいま、「メカノバイオロジー・メカノセラピー研究室」を主宰して、新たな治療方法の開発に取り組んでいる。

地球の重力など、われわれの体にかかる物理的な力によって細胞はさまざまな影響を受けることが分かっており、この研究分野をメカノバイオロジーという。例えば宇宙飛行士は無重力空間に滞在するうちに骨密度が減り、筋肉が衰え、関節の軟骨が小さくなる。また、関節など日頃よく動かす部位に傷ができるときれいに治りにくい、これも物理的な力が影響している。メカノセラピー

**同じ治療方法でも
患者さんに合わせて
変わる寄り添い方**

小川教授のもと、約100名の教室員を擁する日本医科大学の形成外科教室は、付属病院においては「形成外科・再建外科・美容外科」の診療科を展開している。ここでは30名



2019年に教室が主宰したアジア太平洋瘻痕医学会の会場にて教室員たちと



患者さんのために
一番良い治療をすることを考えたとき、
全てを自分でやるという
プライドは捨てなくてはならない。

Dr. Rei Ogawa

とは、こうした体にかかる物理的な力をコントロールすることで傷跡を綺麗に治したり、治らない傷を治す最先端の医療技術である。「このメカノセラピーで、医学にイノベーションを起こしているのが日本医科大学の形成外科学教室。患者さんのQOL向上に貢献を果たせる画期的なアプローチです。例えば私の研究では、超音波を当てて血管の新生を促すことによって傷を治す研究に取り組んでいます」

日本医療研究開発機構の革新的先端研究開発支援事業に採択され、約4億円の支援を受けているまさに国家プロジェクト級の研究だ。

クラブ活動で 医師にとって大切な チームワークを学ぶ

小川教授の大学時代は、形成外科学との出会いだけではなかった。クラブ活動ではバドミントン部と軽音楽部を兼部して、多くの学友を作った。とくに軽音楽部ではドラムスの演奏を担当。

学生時代に修得したドラムスの演奏は、形成外科教室の中でもコミュニケーションに役立っている。楽器を演奏する医師が多い

ため、教室内でバンドを結成。懇親会などで演奏を披露しているという。

クラブ活動では仲間ができてだけでなく、「チームワーク」も学んだ。その経験は、現在の診療でも生かされている。外科医というと、天才的なひとりの医師が神業のように執刀するイメージがある。しかし、形成外科では複数の医師がそれぞれの専門領域で協力しあうことが普通だ。複雑な手術の場合は、同時進行で複数の医師が携わり、できるだけ短時間で手術が終わるようにする。そこでは医師同士のチームワークが欠かせない。

「よく『プライド』という言葉を使う人がいますが、医師にとって『自分がやるんだ!』というプライドは諸悪の根源だと考えています。自分の手に負えないことがあったら、その治療の専門家の協力を仰ぐのが正しい考え方でしょう。順調に手術が進めば、一人でするケースもあります。そんなときも予想されるリスクに備えて、別の専門家にスタンバイをお願いすることもあります」

臨床研修で学生が形成外科をローテーションしてくると、小川教授はクラブ

活動と医療の現場が似ていることをよく話して聞かせるという。チームで協力して、それぞれの持ち場で全力をつくして結果を残すところは同じだからだ。

最後に受験生に向けたメッセージをうかがった。小川教授は医師になりたいと思うのに遅すぎるということはないとエールを送る。

「私自身、医師を目指そうと考えたのは高校3年生の後半でした。だから、いつ医師になりたいと思っても遅いことはありません。目的が決まったら、それに向かって頑張っていきたいです。私自身は小さな目標を設定して、ひとつずつクリアしていくことで最後には合格できました。自分には手が届かないと思えるような目標でも、コツコツと学修していけば、思いはかなうものです」



上 / 学会のあとの懇親会にて、教室内のバンド「Plastics」の演奏
下 / 毎週のカンファレンス後の懇親会。
教職員、海外からの見学者や留学生たちと